



ながとみ りょういち
永富 良一 教授

～ 運動学分野 ～

講義題目

**Eine spannende Reise eines Sportlehrers
in die Sportwissenschaft**

【略 歴】

1984年 3月 東北大学医学部卒業	2002年 6月 東北大学学友会体育部長
1984年 4月 仙台市立病院研修医	2008年 4月 東北大学大学院医工学研究科教授
1986年 4月 東北大学医学部附属病院医員	2011年 4月 東北大学大学院医工学研究科副研究科長 (併任～2020年3月)
1988年 4月 東北大学教養部保健体育学科助手	2020年 4月 東北大学大学院医工学研究科研究科長 (併任～2022年3月)
1993年 4月 東北大学医学部助手	2024年 3月 退職
1994年 4月 東北大学大学院医学系研究科助手	
2002年 6月 東北大学大学院医学系研究科教授	

【研究業績等の紹介】

永富良一教授は1984年3月に東北大学医学部を卒業され、仙台市立病院での内科初期研修を経て、1986年4月に東北大学医学部第三内科で消化器内科医として医療と臨床研究に従事されました。1988年4月に東北大学教養部保健体育学科に助手として赴任後、体育実技教育に従事し、現在まで継続的に担当されています。1994年4月には新設の東北大学大学院医学系研究科障害科学専攻病態運動学分野助手、その後、2002年6月より同専攻運動学分野教授に就任されました。さらに、2008年4月からは大学院医工学研究科健康維持増進医工学分野教授となり、2011年4月からは医工学研究科副研究科長、2020年4月には研究科長に就任されました。

永富教授は運動学・健康科学・スポーツ科学の教育・研究において分子生物学、生理学、疫学、行動科学、情報科学を駆使し、運動・健康・スポーツの科学の進歩に大きく貢献されました。研究室の門をたたく大学院生の運動・スポーツ・健康の問いや、学内外の研究者から提供される問い、企業からの問い、自治体からの問いからはじまるさまざまな研究課題に大学院生や研究室のスタッフとともに挑戦し、これまでの常識を覆すさまざまな知見を得るに至っています。特に骨格筋幹細胞である衛星細胞制御の分子・細胞レベルの内外環境に対する適応メカニズム、地域住民を対象としたコホート研究から得た身体活動・食事・歯磨きなどの生活習慣因子とさまざまな疾患や健康リスクとの関連、運動学習や運動制御に及ぼすさまざまなモードの知覚刺激の影響やセンサーから得られた長時間の行動データの新しい解析方法の提案、あるいは、子どもから高齢者まで身体活動不

足・体力不足解消の実践など、日常生活からスポーツの現場まで社会と直結する数多くの成果を生み出すに当たっています。180名を越える研究室の修了生は国内外の研究教育機関、企業や自治体などで活躍されています。

学内では1994年から学友会体育部長を務め、学生の課外活動を精力的に支援し、その間、東北大学は全国国立七大学総合体育大会で8回の総合優勝を達成しています。加えて、一部の学生および学生団体は各種競技大会でも好成績をあげ、アジア選手権、世界選手権、ワールドカップの代表選手として活躍するに至っています。2022年にはコロナ禍における課外活動支援の功績により総長教育賞を受賞されています。

永富教授は産学連携活動にも積極的に取り組み、革新的医療機器創出人材育成プログラム・ジャパンデザインプログラムの幹事を2015年発足当初より務め、医療機器スタートアップの創出につながっています。また、文部科学省が推進する地域科学技術振興事業やイノベーション事業に参加し、2022年にはCOI-STREAM事業では日常的に利用可能なセンサー情報を参画企業・自治体の健康サービスの社会実装につながる成果を挙げたことにより内閣府第5回日本オープンイノベーション大賞を受賞されています。その他にも多くの企業との共同研究を推進されています。

永富教授は国内では一般社団法人日本体力医学会理事長をはじめ、日本バイオデザイン学会、日本臨床スポーツ医学会、バイオメカニズム学会などで重職を歴任し、国際的にはヨーロッパスポーツ科学学会のフェロー・学術委員としてまたアジアスポーツ科学学会副会長としてスポーツ科学の振興に尽力されています。

上述のように、永富教授の研究活動はあらゆる学問分野に開かれており、さらに、様々な背景を持つ学生や社会人に研究する機会と場を与えてくださいました。まさに「門戸開放」を体現された先生です。